

建学発 2017-第 0161 号

2017 年 12 月 26 日

株式会社 丸榮

取締役 総務本部長 小田原徳幸 殿

一般社団法人 日本建築学会

会 長 古 谷 誠 章

丸榮本館の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてはご理解とご協力を賜り、篤く御礼を申し上げます。

さて、貴社におかれましては、愛知県名古屋市中区栄 3 丁目 3-1 に位置します百貨店丸榮本館の建物について、2020（平成 32）年までに解体し敷地を再開発し新たな商業施設の建設を計画しておられること、新聞報道等の発表にて拝見しております。

丸榮本館は、戦災復興の中で百貨店三星の建物に増築する形で 1953（昭和 28）年に竣工し、その後も 1956（昭和 31）年、1984（昭和 59）年と増築を重ね現在の姿に至っています。設計者は、いずれも近代日本を代表する建築家である村野藤吾が主宰する村野・森建築事務所です。名古屋の繁華街の中心に建つ巨大な建物でありながら、外観や内部に細やかで繊細な意匠を備えた優れたものであり、1954（昭和 29）年には日本建築学会賞を受賞しています。

その建築の有する価値は、別紙「見解」に詳細を示しておりますが、要点は次のようなものです。我が国の都市・建築の持続的発展を考える上で極めて貴重な事例であること。名古屋・広小路の景観形成に重要な役割を果たしている事例であること。百貨店建築という民設の公共空間が栄町に果たした役割を考える上で極めて重要であること。百貨店建築の設計を得意とした近代日本を代表する建築家村野藤吾の代表作の一つであること。

丸榮は江戸期に名古屋で創業した十一屋と昭和初期に創業した三星が合併し戦後の復興期に成長したという歴史を持ちます。丸榮本館は、その歴史と戦後の繁栄を誇る建物であり、名古屋の街に欠かせない建物です。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、よりよい活用計画の策定をご検討下さいますよう、御願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2017年12月26日

丸栄本館についての見解

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 石田潤一郎

1) 建物の概要

愛知県名古屋市中区栄3丁目3-1の位置する百貨店、丸栄本館の建物は、大きく3回の増築を経て現在の姿となっている。

最初に、丸栄の前身の1つである百貨店三星の本館の建物の上部に増築し（第1次増築）、外観のデザインを刷新する形で、丸栄の新本館が建設された。この三星の本館は、戦前に清水組（現・清水建設）によって設計されたもので、地上8階、地下2階の建物として計画され、建設が始まった。しかしながら、戦時下の1937（昭和12）年に施行された鉄鋼工作物築造許可規則により計画を3階建てで止め、規模を縮小して建設された。戦後、その建物の上部に増築する形で、丸栄の新しい本館が建設されたものである。

この最初の増築により、現在の本館の東側に当たる部分が、1953（昭和28）年10月に竣工した。設計は村野・森建築事務所（村野藤吾）、施工は清水建設だった。竣工当時の敷地面積は2,788.5㎡、延床面積は31,941.5㎡。鉄筋コンクリート造、地上8階、地下2階、搭屋3階。高さ31m、搭屋最上部高さ43mとなっている。

その後、今度は先の建物の西側に第2次増築が行われ、現在の本館の西北部分が、1956（昭和31）年3月に竣工した。竣工当時の敷地面積は6,931.1㎡、延床面積は12,743.5㎡。これにより、本館と新館を合わせて、延床面積44,685㎡となった。設計は村野・森建築事務所（村野藤吾）、施工は清水建設。鉄骨鉄筋コンクリート造、地上8階、地下2階、搭屋3階。建物高さ31m、搭屋最上部高さ43mであった。

その後、第2次増築の南側に第3次増築が行われ、現在の本館の西南部分が、1984（昭和59）年に竣工した。この増築により現在の姿が完成する。竣工当時の敷地面積は1,354.3㎡、延床面積は14,243.5㎡であった。3回にわたる増築を合わせると、延床面積は52,200㎡となった。設計は村野・森建築事務所（村野藤吾）、施工は清水建設。鉄骨鉄筋コンクリート造、地上8階、地下2階、搭屋3階。建物高さ31mであった。

3回の増築を重ねた結果、北側を広小路通り、西側を呉服町通り、東側を伊勢町通りに囲まれた長方形形の敷地を埋め尽くす形で建物が建つことになった。

なお1954（昭和29）年には、丸栄本館が日本建築学会賞作品賞を受賞している。また1988（昭和63）年に改修工事が行われたが、そのことが評価され、1990（平成2）年度の名古屋市都市景観賞リフレッシュ賞を受賞している。

2) 歴史的価値

2-1. 建物に関する評価

丸栄本館の建物に関する歴史的価値は、以下の3点において認められる。

① 我が国の都市・建築の持続的発展を考える上で極めて貴重な事例であること

百貨店三星の建物は、清水建設の設計施工によるもので、1937（昭和12）年に立てられた計画では、地上8階地下2階、延床面積8,000坪の建物であったが、日中戦争後の鉄鋼資材統制によって、地上2階（塔

屋1階) 地下2階、延床面積3,800坪の建物に変更され、1939(昭和14)年に竣工した。日本建築学会賞の推薦理由には、こうした史的経緯に対して、「幾多の拘束条件があったであろうが、よくそれを克服しながら作者独自の奔放雄大な構想と繊細巧緻な感覚とで渾然とした建築造形に纏めあげた点」が高く評価されたことが記されている。

清水組の『工事年鑑：皇紀2600年』に載せられた北東側ファサードの完成予想図では、街区一杯に建てられた建物のマス構成と縦格子のファサードが認められ、現状と大きく異なるものではない。また、この建物の内部壁面には、大理石が積極的に採用されていたことが認められるが、戦後増築では、1階部分の外部壁面にも同様の大理石が使用されていることが見て取れる。これらの点において、村野のデザインは、基本的には、戦前の当初計画を継承したものであり、1937(昭和12)年に立てられた計画を、少なくとも広小路側ファサードが完成する1956(昭和31)年までに完成し、この基本計画を1984(昭和59)年にまで展開するという「奔放雄大な構想」を成し遂げたと見えよう。

しかしながら、村野がここで行ったことは、単なる過去の計画の継承ではない。次の2点において彼の「繊細巧緻な感覚」と評された手腕を見出すことができる。まず、主要エントランスを街区中央部から同隅部へ移行させ、街区型建築の隅部の役割を顕現させた点、次に、既存の鉄筋コンクリートによる縦格子のファサードを建物上部まで延長しつつ、コンクリートブロックによる水平帯と垂直帯によって、それをより細やかに分節した点である。

村野がここで30年以上の時間をかけて成し遂げた建築デザインは、我が国の都市・建築の持続的発展を考える上で極めて貴重な事例であると言える。同時に、高度経済成長期を経た百貨店という商業建築において、こうした作品を可能にして来た関係者の不断の努力と企業姿勢は、未だ止むことのないスクラップ・アンド・ビルドという考え方に一石を投じるに相応しい価値観として、高く評価されるべきである。

② 名古屋・広小路の景観形成に重要な役割を果たしている事例であること

近世都市名古屋の目抜き通りが、本町筋と呼ばれる南北方向の通りであったのに対して、近代都市名古屋の目抜き通りは、この通りに直交する東西方向の広小路通りであった。戦前期には、名古屋駅南側から東に延びる広小路通り沿いには、住友銀行名古屋支店(1925年竣工)、名古屋銀行本店(1926年竣工)、名古屋日本徴兵館(1939年竣工)などの、市街地建築物法の絶対高さ規制に則った軒高の建物が建ち並び、統一した街並みが形成された。丸栄本館は、軒高31mで街区一杯に建てられ、全長90mの壁面が広小路通りに面する街区型建築であり、正しく、戦前期の街並みを、戦後に再現したものであった。現在、戦前期に建てられた広小路沿いの街区型建築は、順に取り壊され、高層建築に建て替えられており、丸栄本館は、近代的街並みを物語る重要な歴史的資産と言える。その際、1953(昭和28)年に竣工した北側と東側の基準階ファサードには、三星の縦格子デザインを採用することで、戦前期のイメージが踏襲されたのに対して、1956(昭和31)年に竣工した西側の基準階ファサードには、同時代に流行したモザイクタイルによる壁画建築を全面に採用することで、戦後期のイメージを強く打ち出している。実際に、縦格子デザインは、1935(昭和10)年に竣工した、そごう大阪本店において村野が「ラジオのデザイン」をヒントにしたという建築デザインを踏襲したものであり、モザイクタイルによる壁画建築は、1955(昭和30)年に竣工した、「ドウトン」において挑戦した壁画構成であった(村野藤吾、「丸栄とドウトンの『壁画構成』、『国際建築』、1956年11月号)。

ところで、名古屋市では、敗戦のわずか4ヶ月後に、田淵寿郎技監(1890-1974)を中心とする戦災復興調査会が「大中京再建の構想」を発表し、全国に先駆けた戦災復興計画案が作成された。市街地中心部では、近世以来の街区を帯状に均して道路とすることで広幅員道路が形成され、それ以外の碁盤割り道路は拡幅され、街区の隅切が行われた。丸栄本館では、道路拡幅のための曳屋を行った事実はないが、街区の隅切を巡る北東角と北西角の建築デザインの違いとして反映している。すなわち、北東角では、エントランスを1ベイ分のピロティとして後退させ擬似的な隅切が形成されたのに対し、北西角では、実際に隅

切に沿ったエントランスが設けられ、戦前期の隅切が設けられていない建築デザインを、戦後期の都市計画にตอบสนองせようとした痕跡を見出すことができる。さらにまた、こうした街区両隅部に設けられたエントランスは、当該敷地が、栄町と広小路本町の路面電車停留所の間にあったために、重視された結果とも取れる。

このように、丸栄本館は、広小路通り沿いの近代的街並みを物語る上で、戦前期と戦後期を結ぶ街区型建築デザインの極めて重要な事例として評価できる。

③ 百貨店建築という民設の公共空間が栄町に果たした役割を考える上で極めて重要であること

東寄りの北側ファサードに設けられた'MARUET'という看板の上には、「動物をイメージした」という彫像が載せられ、西側ファサードには、先述した壁画が設けられている。このことは、栄町と広小路本町の路面電車停留所からの遠望に大きく寄与した結果でもあり、栄町の民設の公共空間のあり方を示すものでもある。

ところで、丸栄本館は、小林一三が阪急百貨店で見出したターミナルデパートではない。しかしながら、1959（昭和34）年に地下入口が新設され、地下鉄と地下街への連絡経路が新設され、この建物は栄町の地下空間のターミナルとなったと言える。こうした地下鉄と地下街からへの連絡経路は、上記で評価した建物外観を一瞥することのない新たな公共空間を創出した。その際、東郷青児によって描かれたエレベータ扉画（複製現存）と7階大食堂壁画（滅失）は、内部空間が連続する公共空間にとって、建物外部の壁画同様に、重要な意味を持つ。あるいはまた、現存する、階段・エレベータ周辺の石張（大理石）の模様、階段鉄製手摺子の装飾、手摺上部の曲線断面を持つ木製笠木、独特の曲線を用いた取手（屋上出入口扉）、これらの細部はいずれも丁寧かつ繊細にデザインされており、この百貨店を訪れる者の目を楽しませる。さらにまた、1953（昭和28）年には本館に展望台が、翌年にはスポーツランドが、それぞれ開設され、屋上は、様々な催しが開催される栄町の新しい広場でもあった。

丸栄本館は、一般市民が建物の隅々まで慣れ親しんで来た百貨店建築であり、百貨店建築という民設の公共空間が栄町に果たした役割と功績は、公設の公共空間以上の価値があると言える。

2-2. 設計者に関する評価

丸栄本館は建築家村野藤吾の作品であることにおいて次のような歴史的価値を有する。

百貨店建築の設計を得意とした近代日本を代表する建築家村野藤吾の代表作の一つであること

丸栄本館の設計者である村野藤吾は、1891（明治24）年に佐賀県に生まれ、1918（大正7）年に早稲田大学建築学科を卒業した。その後、大阪の渡辺節が主宰する渡辺建築事務所に入所し、1929（昭和4）年に大阪に村野建築事務所（1949年に村野・森建築事務所に改称）を開設。1984（昭和59）年に亡くなるまでに、商業施設やオフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けた、近代日本を代表する建築家である。

その作品のいくつかは、日本建築学会賞や日本芸術院賞を受賞している。また村野は、1955（昭和30）年には日本芸術院会員となり、1967（昭和42）年には文化勲章を受章するなど、日本を代表する建築家としてよく知られている。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍した。

村野の建築作品は、2005（平成17）年には宇部市渡辺翁記念会館（1937年竣工）、2006（平成18）年には広島世界平和記念聖堂（1953年竣工）、2009（平成21）年には村野が増築の設計を担当した高島屋日本橋店（1952年竣工）が、それぞれ国の重要文化財に指定された。また、村野が改修の設計を担当した迎賓館（旧赤坂離宮／1974年改修）は近代の建築として初めて国宝に指定されるなど、近年村野藤吾の作品

は文化財としての価値が高く評価されている。村野藤吾ほど多数の建築作品が国の重要文化財や国宝に指定されている近代の建築家は他にいない。

村野は、百貨店の建築を多数手掛けている。戦前期にはそごう大阪店（1935年竣工）、大丸神戸店（1936年竣工）、高島屋飯田神戸支店（1936年竣工）など、戦後も高島屋日本橋店増築、そごう有楽町店（1957年竣工）、近鉄百貨店阿倍野店（1958年竣工）、近鉄百貨店上本町店（1969年竣工）などを次々に手掛けている。共通しているのは、それぞれに外観のデザインに工夫を凝らしていること、また内部でも階段や食堂などに凝った装飾的なデザインが見られたことである。特に外観については、そごう大阪店では御堂筋からの見え方を重視してデザインしたとし、大丸神戸店では窓のデザインがテーマだったとするなど、外観に細心の注意を払っていた。

丸栄本館の外観デザインについては、戦前の建物の上に増築しており、その柱が太く、そのまま柱を見せたファサードにすると「固すぎて大衆とはなれる」、そのため「やわらかくしながらファサードを締めた」という（村野藤吾「建築美を探る八章」、『国際建築』、1955年4月号）。また、戦前に村野が設計したそごう大阪店の外観デザインと比較しながら、そごう大阪店は「縦線ばかりでシマリがない」ため「横線」が必要と考え、丸栄本館では縦線と横線の格子で壁面をデザインしたと、村野が論じている。丸栄本館の外観には、大衆との関係や外観の見え方を検討して、考え抜かれたものだったと言える。建築を大衆との関係から考え続けた村野の独自性がよく表れている。

前述のように、村野はこの丸栄本館の最初の増築設計により、1954（昭和29）年に日本建築学会賞作品賞を受賞している。村野は生涯に3回の同賞を受賞しているが（残りの2つは世界平和記念聖堂と日本生命日比谷ビル）、その最初の受賞であった。丸栄本館は、村野の数百を数える建築作品の中でも、極めて重要な意味を持つものである。

2-3. 総合的価値

上記の通り、丸栄本館には、戦前期の建物を基にしながら三度にわたって増築した経緯が、我が国の都市・建築の持続的発展を示す好例であること、名古屋・広小路という大都市の中心市街地の景観形成に大きく寄与したこと、公共空間を民間が提供した好例であること、著名な建築家・村野藤吾の代表的な建築作品の一つであること、が主な価値であり、我が国における重要な建築遺産であるとともに、大都市名古屋における社会的資産であるといえることができる。したがって、これらを勘案すると、丸栄本館の取り壊しはこれまでに幾多の人々の努力によって蓄積された遺産の破壊であり、かつ、都市における資産の喪失である。

最後に、所有者など関係の方々が、日本建築学会作成「建造物の評価と保存活用ガイドライン」（2007年3月制定）（<http://www.aij.or.jp/scripts/request/document/070810-1.pdf>）を参考にして、建物の価値を正確に把握されることを望む次第である。

3. 建築写真



図1 丸栄本館 北東側外観



図2 丸栄本館 北西側外観



図3 丸栄本館 北東角オブジェ



図4 丸栄本館 北西外壁装飾



図5 丸栄本館 エレベータ扉

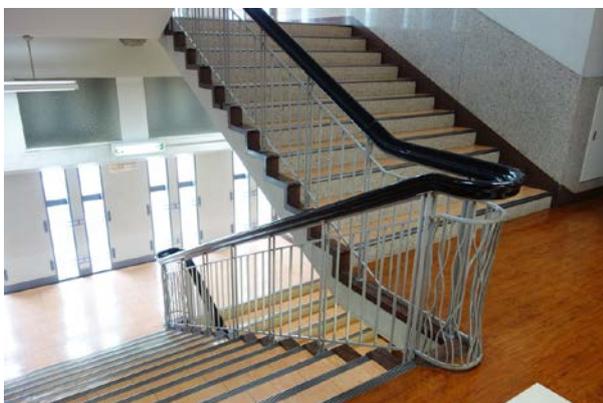


図6 丸栄本館 階段



图7 丸栄本館 階段手摺



图8 丸栄本館 ドア取手



图9 丸栄本館 屋上搭屋

(撮影者: 图1,2/堀田典裕 图3,4,5,6,7,8,9/笠原一人)